# 秋艸堂拾遺記

丹　尾　安　典

## 1．如々山荘句集選者前文・悼句

早稲田大学の前身・東京専門学校の第二代校長を務めたのは、郵便制度の基礎を築いた前島密で、明治20（1887）年から同23（1890）年までの三年間、その職にあった。前島は大正８年に没し、翌大正９年に彼の伝記『鴻爪痕』が刊行された。同書の印刷は早稲田系の日清印刷株式会社で、その創業時代には「金融上同氏（＊前島密）の援助を受けた」という（市島春城『随筆早稲田』翰墨同好会、昭和10年）。『鴻爪痕』の奥付には「編輯者　市野彌三郎」と記載されているが、市島謙吉（春城）の編輯だと言ってよい。同書の「小序」冒頭に市島は「本書は前島男爵家に於て故翁の事歴を永久に伝へ、且つ其生前親炙したる人々に記念として頒つべく是が編纂を予に託せられしものにて」云々と書いている。そしてさらに次のようにも記す。

「本書附するところの故人の遺稿中、漢詩は塚原周造君特に意を用ひて撰ばれ、俳句の撰は會津八一君を労せり。是れ亦併せ記して深く感謝の意を表す」と。

その俳句集は前島の横須賀に造った別荘「如々山荘」にちなみ「如々山荘句集」と題された。この句集冒頭には、八一の小文と一句が以下のように掲げられている。

如々山荘句集

會津八朔選

野にころげたる南瓜に身をくらべ、大なる楓折れたりとて人を喞ちけむ翁も早空しくなりはて給ひぬ。今その詠草を拝するに、淡雅清白の高風ます〳〵欽慕するに堪へたり。

しろかねの芒折れたり水の上

八朔道人

「會津八朔選」と「八朔道人」とがはぶかれているが、句はその前文と共に、『會津八一全集　第六巻』（中央公論社、昭和57年９月）に大正８年の作としておさめられている。全集に引かれた前文の末尾には、「（註・前島密の『如々山荘句集』を選して、これに序せるもの。句集は自叙伝『鴻爪痕』に収む）」とある。全集では句の冒頭「しろかねの」に濁点をうって「しろがねの」としている。「しろがねの」の表記は「しろかねの」の読みを許さないが、「しろかねの」の表記は「しろがねの」の読みを許容する。この句はかならず「しろがね」と読まねばならぬものでもなく、「しろかねの」と発しても成り立つ詠であるから、原文どおり「しろかねの」としておくべきであろう。

八朔道人の前文について、蛇足少々。

道人が「野にころげたる南瓜に身をくらべ」と書いているのは、前島の次句による。

老ぬれば野に転げたる南瓜哉

「大なる楓折れたりとて」云々は、以下の句およびそこに付された前文にちなむ言及である。

明治四十二年十月廿六日朝偶然に甲東大久
保公の額を堂の北に移し、其迹に春畝伊藤公
のを、而して其迹に古筠金玉均氏のを掲げた
るに、其日同時頃に春畝公はハルピンにて兇
手に斃れたりとの報に接し、又園丁は庭上の
楓樹三本虫害の為めに折れたりと告ぐ。余り
の奇感に打たれければ

大なる楓樹折れたり二三本

## 2．英語教科書

會津八一が没したのは、昭和31年11月21日。同月27日の『早稲田大学新聞』に柳田泉は故人を回想してこう記している。

「私は、四十年前にこの大学で先生を師とした学生の一人である。先生は、なくなつたときは、東洋美術史の権威、和歌の道の大家、書道の一本山、文学博士、早大名誉教授、新潟市名誉市民などといふ幾つかの肩書につゝまれて大往生をとげたといふ。私どもが師と仰ひだ四十年前には、ただ一介の青年学徒といふにすぎなかつた。私どもは東洋美術史だの、和歌だの書道だのを学んだのではない、英文学、殊に英国の詩の講義を聞いたのである。グレーク(ママ)だの(注)、シエリー、キイツなどのロマンチツクな詩歌を教わ(ママ)つた。そうした英詩の講釈の間に、漢詩だの、蕪村一茶の俳句だのがとび出すので変つた先生だとは、皆考へて(ママ)いたらしいが、かう変らうとは、私でさへ思つて(ママ)いなかつた」(「孤鶴いずれにか去る―會津八一先生を憶う―」『早稲田大学新聞』1956年11月27日)。

かような指摘を読むと、英語や英文学の教師であった會津八一のことは、あまり語られてこなかったし、調べられてもいないように思われてくる。授業中に私語する学生がいると、八一は英語のテキストを読みながらその学生の襟首をつかんで、教室外にほうりだした、という話を加藤諄先生からうかがったことがあるけれども、私とてせいぜいそんなエピソードを耳にした程度にすぎない。柳田は八一が何かにつけて「ギリシヤ、ギリシヤ」と語っていたと伝え、そしてそれは早稲田に迎えられたラフカディオ・ハーンからの感化の結果であり、「ハーンの伝え(ママ)たギリシヤや、ハーンの講じたバイロン、シエリー、キイツの情熱が、東洋美術史の研究となり、六朝文字への探究となり、天平芸術へのあこがれとなり、万葉集への思慕となつたものであらう。私はさう思ふ」と述べている。

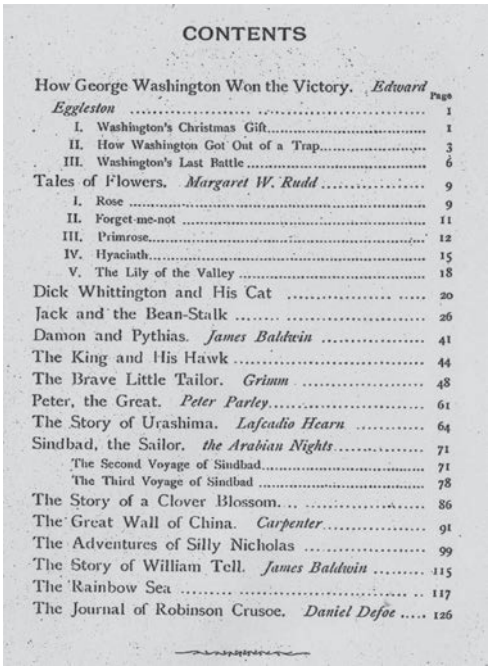
だとすれば、會津八一と英文学研究との関係は緻密な考察がなされてもよいはずだと思うし、彼が編んだ英語の教科書などもきっと参照資料たりうるものになろうと愚考する。

會津八一は明治四十五年に、吉江喬松とともに、中学校用の英語教科書『NEW ENGLISH PROSE』三冊を編んだ。私が参照した国立教育政策研究所教育図書館所蔵資料の奥付によれば「中興館」「建文館」二社の共発兌で、この三冊の発行日はいずれも「明治四十五年二月十日」となっている。吉江の肩書きは「LECTURER IN THE

WASEDA UNIVERSITY AND THE WASEDA MIDDLE SCHOOL」、會津のそれは「LECTURER IN THE WASEDA MIDDLE SCHOOL」である。

第一冊（FIRST BOOK）は第三学年用（THIRD YEAR GRADE）、第二冊（SECOND BOOK）は第四学年用（FOURTH YEAR GRADE）、第三冊（THIRD BOOK）は第五学年用（FIFTH YEAR GRADE）である。

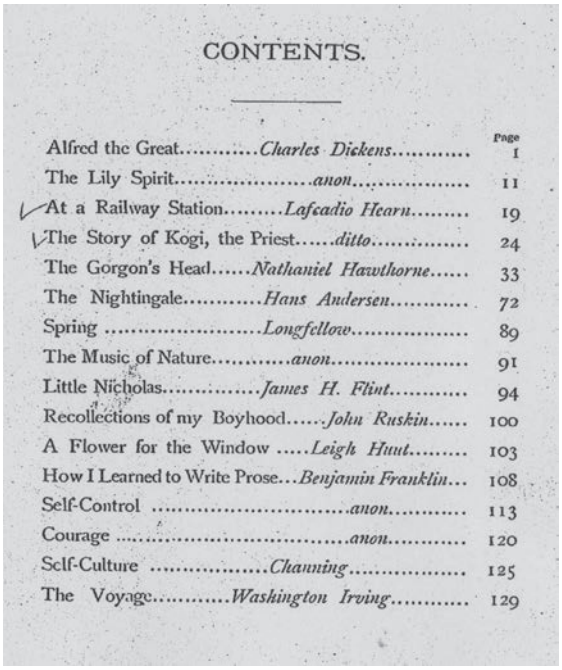
各冊の目次を図版に掲げておく。三冊すべてに、ラフカディオ・ハーンのテキストが含まれている。第一冊（**図1**）の「The Story of Urashima」、第二冊（**図2**）の「At a Railway Station」「The Story of Kogi, the Priest」、第三冊（**図3**）の「At Yaidzu」であるが、これらの選択には、會津八一の意向がかなり反映されているものと推測される。こういう例はほかにない。チャールズ・ディケンズとジョン・ラスキンのテキストが、第二冊と第三冊にとりあげられているのが、これにつぐ。



CONTENTS

| | Page |
|---|---|
| How George Washington Won the Victory. *Edward Eggleston* | 1 |
| I. Washington's Christmas Gift | 1 |
| II. How Washington Got Out of a Trap | 3 |
| III. Washington's Last Battle | 6 |
| Tales of Flowers. *Margaret W. Rudd* | 9 |
| I. Rose | 9 |
| II. Forget-me-not | 11 |
| III. Primrose | 12 |
| IV. Hyaciath | 15 |
| V. The Lily of the Valley | 18 |
| Dick Whittington and His Cat | 20 |
| Jack and the Bean-Stalk | 26 |
| Damon and Pythias. *James Baldwin* | 41 |
| The King and His Hawk | 44 |
| The Brave Little Tailor. *Grimm* | 48 |
| Peter, the Great. *Peter Parley* | 61 |
| The Story of Urashima. *Lafcadio Hearn* | 64 |
| Sindbad, the Sailor. *the Arabian Nights* | 71 |
| The Second Voyage of Sindbad | 71 |
| The Third Voyage of Sindbad | 78 |
| The Story of a Clover Blossom | 86 |
| The Great Wall of China. *Carpenter* | 91 |
| The Adventures of Silly Nicholas | 99 |
| The Story of William Tell. *James Baldwin* | 115 |
| The Rainbow Sea | 117 |
| The Journal of Robinson Crusoe. *Daniel Defoe* | 126 |

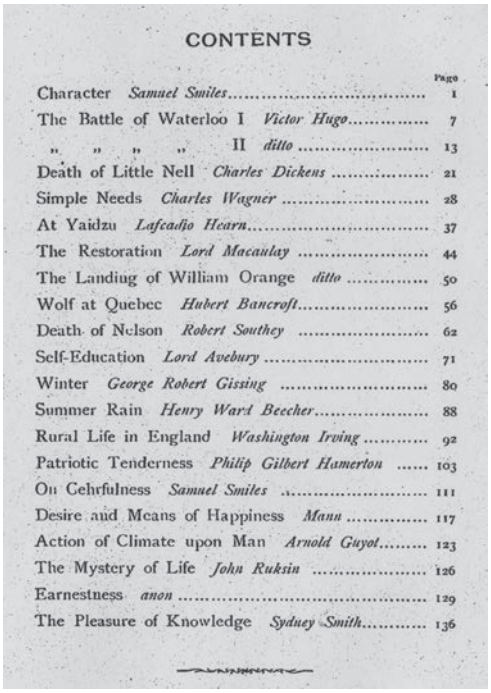
**図1『NEW ENGLISH PROSE』第一冊目次**



CONTENTS.

| | Page |
|---|---|
| Alfred the Great.....*Charles Dickens* | 1 |
| The Lily Spirit.....*anon* | 11 |
| At a Railway Station.....*Lafcadio Hearn* | 19 |
| The Story of Kogi, the Priest.....*ditto* | 24 |
| The Gorgon's Head.....*Nathaniel Hawthorne* | 33 |
| The Nightingale.....*Hans Andersen* | 72 |
| Spring .....*Longfellow* | 89 |
| The Music of Nature.....*anon* | 91 |
| Little Nicholas.....*James H. Flint* | 94 |
| Recollections of my Boyhood.....*John Ruskin* | 100 |
| A Flower for the Window .....*Leigh Hunt* | 103 |
| How I Learned to Write Prose...*Benjamin Franklin* | 108 |
| Self-Control .....*anon* | 113 |
| Courage .....*anon* | 120 |
| Self-Culture .....*Channing* | 125 |
| The Voyage.....*Washington Irving* | 129 |

**図2『NEW ENGLISH PROSE』第二冊目次**



CONTENTS

| | Page |
|---|---|
| Character *Samuel Smiles* | 1 |
| The Battle of Waterloo I *Victor Hugo* | 7 |
| " " " " II *ditto* | 13 |
| Death of Little Nell *Charles Dickens* | 21 |
| Simple Needs *Charles Wagner* | 28 |
| At Yaidzu *Lafcadio Hearn* | 37 |
| The Restoration *Lord Macaulay* | 44 |
| The Landing of William Orange *ditto* | 50 |
| Wolf at Quebec *Hubert Bancroft* | 56 |
| Death of Nelson *Robert Southey* | 62 |
| Self-Education *Lord Avebury* | 71 |
| Winter *George Robert Gissing* | 80 |
| Summer Rain *Henry Ward Beecher* | 88 |
| Rural Life in England *Washington Irving* | 92 |
| Patriotic Tenderness *Philip Gilbert Hamerton* | 103 |
| On Cehrfulness *Samuel Smiles* | 111 |
| Desire and Means of Happiness *Mann* | 117 |
| Action of Climate upon Man *Arnold Guyot* | 123 |
| The Mystery of Life *John Ruksin* | 126 |
| Earnestness *anon* | 129 |
| The Pleasure of Knowledge *Sydney Smith* | 136 |

**図3『NEW ENGLISH PROSE』第三冊目次**

吉江喬松・會津八一共編の『NEW ENGLISH PROSE』は、後者の東洋美術研究や書作、和歌・俳句などへの関心をもっぱらとする者たちの視界におさめられることはなかったと思うが、じつは英語教育研究の分野ではすでにしられており、大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編『英語教育史資料　第３巻　英語教科書の変遷』（東京法令出版、昭和55年）の第１章第６節「著名文人編輯の検定教科書解説」のなかで、写真掲載ではないけれども目次紹介もなされているし，この教科書の概略についても語られている。

すでに言及がある上記教科書をあえてここにとりあげたのは、吉江との共編ではなく、會津のみが編んだ英語教科書が出版されていた可能性について書

きしるしておきたかったからである。たまたま一昨年に古書肆で入手した英語教科書がある。上條辰蔵編の『NEW SUPPEMENYARY READERS, THIRD YEAR』（中興館書店、大正三年二月二十二日訂正再版）であるが、その末尾頁に載る同書店広告のなかに、上記の［ニュウ、イングリッシュ、プローズ］にならんで「早稲田中学校講師・早稲田中学校講師　会津八一先生考案［ニュウ、ディクテーション、ブック］郵税金二銭／定価金九銭／石版刷上紙全一冊」（**図４**）と記載されている。早稲田中学校講師の肩書きが二度くり返されているのは誤植であって、当時會津

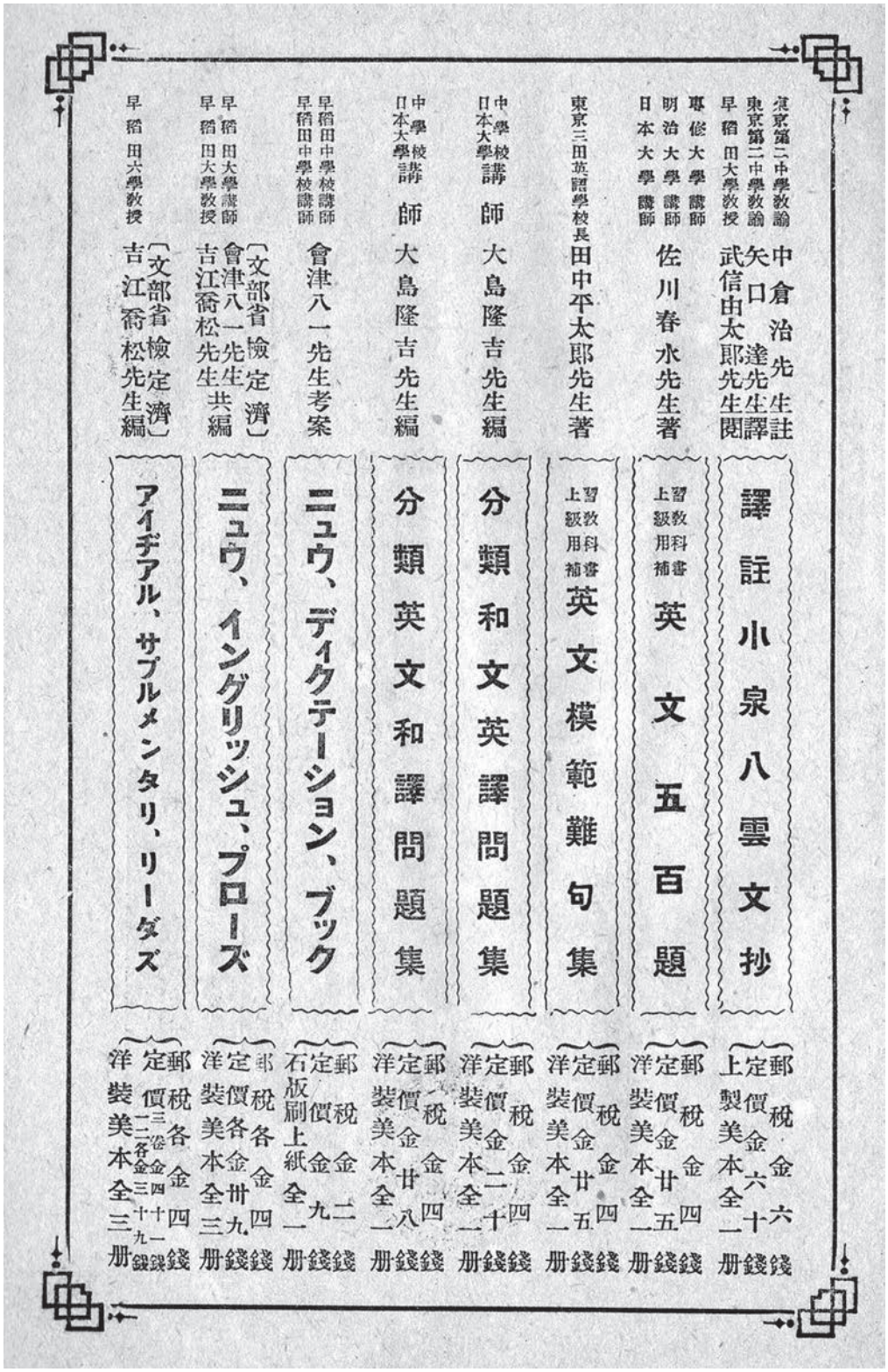



**図４『NEW　SUPPEMENYARY　READERS』掲載の英語教科書広告**

八一は早稲田大学英文学科の講師でもあったから、おそらく最初の肩書きは「早稲田大学講師」なのであろう。この教科書は、未見である。探しているがなかなかみつからない。出版されなかったということも考えられるが、刊行されていた可能性も充分にあろうかと思う。秋艸道人に関心をよせられる諸氏、いずれかにて同教科書のお目に留まるおりあらば、ご一報を乞う。

(注) この追悼文は柳田泉著『明治の書物・明治の人』（桃源社、昭和38年）に再録され、そこにおいて「グレーク」は「ブレーク」と訂正されている。

## 3．昭和10年の會津八一

岡田啓介内閣は昭和９（1934）年７月８日から昭和11（1935）年３月９日まで続いた。最後は内閣総辞職で、これは昭和11年２月26日の反乱すなわち二・二六事件に起因する。このクーデタの直前２月１日に同内閣文部大臣松田源治が急死した。松田の一般的な知名度はほとんどないに等しいが、日本近代美術史においては、大きな改革をおこなった閣僚としてよく知られている。

当時の官展は、文部大臣の管理下にある帝国美術院が主催する帝展であった。昭和10年５月28日に、帝国美術院の大きな改組が発表された。増野恵子「松田改組再考―美術行政の観点から―」（増野恵子・小林俊介編『帝展改組／新体制と美術』ゆまに書房、2011年）より引けば、その内容は「帝院規定を官制とし、帝院を諮問機関から審議機関に変えて権限を強化するとともに、会員定数を三〇名から五〇名に大幅に増やし、在野の有力作家を多数新会員に任命した」ということになる。

増野はこうも述べている。

「その手続きや内容の当否、また帝国美術院展覧会のありかたをめぐって賛否が分かれ、以後約二年間にわたり美術界全体を翻弄する騒動へと展開していく。この改革と、それに端を発した一連の騒動は、当時の文相松田源治の名をとって「松田改組」と通称される」と。

改組が発表されてからひと月余りのちの７月４日、松田大臣は早稲田大学を訪問した。

これを報ずる三記事を以下にあげておく。

①『早稲田学報』（昭和10年７月10日）記事

松田文部大臣は添田、三辺両次官、赤間専門学務局長、小島秘書官と共に七月四日午前十時来校、恩賜館に小憩の後田中総長外大学幹部の案内にて図書館、演劇博物館、武道館、テレヴイジヨン実験室其他校内各般の諸施設を参観観察し、正午大隈会館に於て大学理事者と午餐を共にし、食後種々懇談を遂げ午後二時辞去した。

②『東京朝日新聞』（昭和10年７月５日、夕刊）記事

松田文相が四日午前早大を見学した

早速「史学研究資料陳列室」へ続いて隣りの「東洋美術史研究室」から、早大自慢の演劇博物館へ―

河竹館長が日本で最初に発明された「廻り舞台」の模型の前で蘊蓄を傾けて説明すると大臣

歌舞伎座で政談演説しとる時にのー、藻寄鐵五郎といふ荘士が、廻り舞台の下にもぐり込んで演説最中クルツと廻してしまつたことがあつたつけクルツとな、ワツハツハ・・・・・・

と飛んだ想ひ出話を持ち出す、山本博士のテレヴイジヨン研究室を見学二時引き揚げた

③『早稲田大学新聞』（昭和10年８月21日）記事

◇・・・七月四日そぼ降る小雨を冒して松田文相は添田政務次官、三辺事務次官、赤間専門学務局長、小島秘書官を伴ひ来園した、田中総長、金子常務理事、増田義一氏（理事）小山松寿氏（維持員）各学部長等の出迎へを受け先づ恩賜館内の西村博士の陳列室、會津博士の研究室を参観、演劇博物館では団十郎、澤田正二郎の才筆を「俳優はなか〳〵字がうまいな」と賞めちぎり河竹館長の「世界でも珍しいので最近外国人が沢山見物に来ます」との説明にすつかり感心した、◇・・・雨がだん〳〵大粒になつたが平気で武道館へ廻りドン〳〵と歓迎の大太鼓の響く中を三階へ上れば丁度北大との弓道試合中用意された椅子に大臣は腰を下して観戦、次は学園自慢のテレビイジヨン研究室で映像を見説明を聴ゝ図書館で番茶に咽喉を湿して「化石の家」に入り「こんな大きなものが日本に住んでゐたか」と驚嘆の目を見張つた、最後に大隈講堂を観、大隈会館では故老侯の遺物に接し、総長の午餐会に臨み歓談を盡して帰つた

②③記事によって、松田大臣が「東洋美術史研究室」＝「會津博士の研究室」を訪ねたことがわかる。③記事には小さくて不鮮明ながら（上）（中）（下）と重ねられた三点の写真が掲載されている（**図５**）。そこに付された

學園の偉容に
松田文相激賞
次官局長と共に視察

◇…七月四日そぼ降る小雨を冒して松田文相は添田政務次官、三辺事務次官、赤間專門學務局長、小島秘書官を伴ひ來園した、田中總長、金子常務理事、增田義一氏（理事）小山松壽氏（維持員）各學部長等の出迎へを受け先づ恩賜館内の西村博士の陳列室、會津博士の研究室を參觀、演劇博物館では團十郎、澤田正二郎の才筆を「俳優はなか〳〵字がうまいな」と賞めちぎり河竹館長の「世界でも珍しいので最近外國人が澤山見物に來ます」との説明にすつかり感心した、◇…雨がだん〳〵大粒になつたが平氣で武道館へ廻りドン〳〵と歡迎の大太鼓の響く中を三階へ上れば丁度北大との弓道試合中用意された椅子に大臣は腰を下して觀戰、次は學園自慢のテレビイジョン研究室で映像を見説明を聽ゝ圖書館で番茶に咽喉を濕して「化石の家」に入り「こんな大きなものが日本に住んでゐたか」と驚嘆の目を見張つた、最後に大隈講堂を觀、大隈會館では故老侯の遺物に接し、總長の午餐會に臨み歡談を盡して歸つた【寫眞(上)恩賜館前(中)演劇博物館參觀(下)テレビイジョン研究室における文相】

**図５『早稲田大学新聞』（昭和10年8月21日）記事と写真**

キャプションの（上）は「恩賜館前」、（中）は「演劇博物館参観」、（下）は「テレビイジヨン研究室における文相」となっているが、写真にうつされた面々のなかに會津八一を見つけるのはむずかしい。

ところが本学「大学史資料センター」が所蔵する写真（**図６**）、「松田源治文部大臣一行来校記念」（「id 2173」、「写真番号 B96-08」、「撮影者　小石川音羽宮島写真館製」、「撮影時期　1935（昭和10）年７月４日」）には、その存在がはっきりとみとめられる。前より三列目のむかって左から二人目の大柄な人物は會津八一である。ちなみに會津のむかって右うしろに立っているのは河竹繁俊、さらにまた、むかって左手前（二列目左端）のモノクロ写真では黒っぽく見える上着の人物は西村眞次、前列左から三人目が松田源治文相、四人目が田中穂積第四代総長、ひとりおいた小柄な人物は鹽澤昌貞第二代総長。松田と田中のすぐうしろ、このふたりの間に立つのは増田義一だと思われる。この写真は大隈会館での「午餐」の前か後に撮影されたものであろう。

**図６「松田源治文部大臣一行来校記念」写真（早稲田大学大学史資料センター蔵）**

* 『NEW ENGLISH PROSE』の所蔵機関については、早稲田大学図書館レファレンス・カウンターの湯川亜矢さんから有益なる御教示をたまわった。図６の写真中の河竹繁俊同定については演劇博物館大内曜さん、西村眞次同定については文学学術院西村正雄教授の御協力を得た。記して謝意を表する。